



← 飛来したリンドバーグ機の前に立つリンドバーグとアン夫人。二人は新婚旅行を兼ねて来日しました。

霞ヶ浦（その6）～国際空港 霞ヶ浦飛行場～

1921（大正10）年に開場した霞ヶ浦海軍航空隊飛行場は当時としては東洋一といわれ、世界各国から航空機が飛来する空の玄関口となっていました。世界一周をめざす飛行機が次々と飛来、1929（昭和4）年にはドイツの大飛行船ツェペリン伯号、1931（昭和6）年8月にはリンドバーグ夫妻も飛来し、霞ヶ浦飛行場は国際的にも有名な飛行場となりました。

ツェペリン伯号

ドイツのツェペリン飛行船は、1891（明治24）年からドイツのツェペリン伯爵が開発に乗り出した硬式飛行船で、1900（明治33）年に飛行に成功、1909（明治42）年、ドイツ海軍に納入され、第一次世界大戦中にはパリやロンドンの夜間爆撃を敢行しています。1918（大正7）年、ドイツは敗戦国となり飛行船の大部分が破壊されましたが、エッケナ博士らのツェペリン飛行船会社によつて飛行船の再建が計画され、1929（昭和4）年、ツェペリン伯号 LZ 127号機が建造されました。全長233.5m、最大直径30.5m、最大体積が十万五百m³、重量55.7トン、最大速度時速117km、航続距離12000km、浮力には水素、動力にはブラウガス（石油気化ガス）を使い、530馬力の発動機5基を備え、乗員35人と乗客40人を乗せる能力がありました。このツェペリン伯号は世界航空史上空前絶後の超大型飛行船で、世界各国に衝撃をあたえました。さらにドイツはツェペリン伯号による世界一周計画を発表し、全世界を驚かせました。

ツェペリン伯号は1929（昭和4）年8月8日、レイクハーストのアメリカ海軍航空基地を出発、大西洋を横断して、ツェペリン伯号の故郷であるドイツのフリードリヒスハーフェン飛行場に到着、所要時間は55時間24分でした。次いで8月15日、フリードリヒスハーフェンを飛び立ったツェペリン伯号は、シベリア上空を無着陸で横断すると8月19日午後4時20分霞ヶ浦海軍航空隊上空を通過、その後東京、横浜上空を訪問飛行の後、同日午後6時27分に霞ヶ

浦飛行場に着陸しました。ドイツと日本間の11,000kmをわずか100時間程で横断、平均時速は約110kmで、当時としては信じられないスピードでした。

この時、霞ヶ浦飛行場では、飛行船を一目見ようと、10万人余りに及ぶ大群衆の波で埋まり、大変な騒ぎになりました。その時の様子を当時土浦中学5年生であった鶴町武雄氏（中学29回）は次のように記しています。

「8月19日、起床すると直ぐ新聞を見た。紙面には『ツェペリン伯号勇姿を北海道上空に、現す』と大文字がくつきりと、浮き出て見えた。

天気は良好で東雲の空には数条の雲が七彩の光に映じて薄紅に匂っていた。自動車は絶えず往来し、それに続いて自転車の人、徒歩の人が蟻の行列の如くに霞ヶ浦航空隊に急いでいる、全く黎明などには、人一人通らぬ我が寒村荒川沖は一朝にして大都会と化した。

朝飯を済ましてから二、三の友人と連れだつてツェペリン伯号を観仰せんと家を出た。（中略）

午後3時は過ぎた。突然！友の一人が叫んだ。友の指示する方を見よ！鬱蒼たる森の左端約一米の處にポチリと滴したインクの飛沫の如き黒点が真直ぐに此の地を指して猛進して来る。一分二分、三分、五分、十分、十五分、発動機が見える。ゴンドラが見える、数万の観衆の心は躍った。

銀白色の巨体はプロペラの音高く、地を押し雲を退けて頭上に迫って来た。お、！偉大と言おうか勇壮と言おうか壮絶と言おうか！唯見る空中の楼閣、恍然として驚嘆するのみである。

太陽は地平線に没せんとしている。真紅に燃ゆる雲は止まりて動かず。暮色は蒼然として襲ひ来り、ツェペリン伯号は日本士官の活発なる指揮と、敏活な水兵とによつて徐々と大格納庫に呑まれて行く。全く歴史的の光景である。

かくして、世界の人々の會て空想に過ぎなかつた此の大挙は見事に実現された。（以下略）「進修31号」・1930（昭和5）年3月1日発行

飛行船を見慣れていたであろう土浦中学の生徒たちも、さすがにその巨大さと華麗さに驚嘆し、敗戦国でありながら世界初の快挙に挑むドイツ国民の底力に畏敬の念を抱いています。



海軍の下士官たちによって押収（欧州）格納庫に引き込まれるツェペリン伯号。

ツェペリン伯号が霞ヶ浦に滞在した5日間に、全国各地から約40万人の人々が訪れました。上野からは臨時列車が運行され、土浦と阿見間の常南電車は満員で、徒歩でやって来る者も多く、土浦から人の波が続きました。当時阿見村には電話が少なかったので、電話があった丸山医院は新聞社の取材基地となり、

「君はツエツペリンを見たか!」という新聞の見出しが流行語になったと言われています。

5日間霞ヶ浦にとどまったツエツペリン伯号は、8月23日夕刻、霞ヶ浦航空隊の見送り機5機に誘導され、太平洋の彼方アメリカに向けて飛び立つて行きました。

チャールズ・リンドバーク機

1931(昭和6)年8月26日にはアメリカのリンドバーク夫妻が霞ヶ浦に飛来しました。チャールズ・リンドバークは、1927(昭和2)年にスピリット・オブ・セントルイス号でもってニューヨーク・パリ間の大西洋単独無着陸飛行をはじめて成し遂げた空の英雄でした。そのリンドバークが北太平洋航路調査のため、夫人を伴ってロッキードの水上機シリウス号でやってきたのです。リンドバーク夫妻はワシントンを出発、ニューヨーク、カナダ、アラスカ州、カムチャツカ、択捉を経て、8月23日には日本の国後島、24日には根室市、26日に霞ヶ浦に到着しました。霞ヶ浦までの距離は12,385km、飛行時間85時間11分、30日間を要しました。到着地の霞ヶ浦航空隊水上班には大群衆が押し寄せ、東京へ向かう夫妻を一目見ようと土浦駅も大観衆で埋まり、「リンドバーク万歳」の歓声が絶え間なくあがっていました。土浦中学生たちも夏休みとあって、何人もの生徒が航空隊を訪れており、当時土浦中学3年の山本武義氏(中学33回)は、この時の様子を「リンドバーク大佐を迎へに」と題して、次のように述べています。

に進んで来る。双眼鏡を取り出して眼にあてた。真赤に塗られた一枚の翼。真黒な胴。やはり真赤な後の翼。単純な型で、いかにも軽快な飛行機。翼が二枚で、支柱や針金線などで交叉されている、どっしり重さうな飛行機に比較して本当に明るく、ぱつぱつといて、いつまでもはつきり頭に残っているような簡単な飛行機。ずんずん近づいて来る。とうとう来たのだ、リンドバーク機が来たのだ。今日8月26日。リンドバーク機が来るときいて、少し早いが遊びながらと、11時頃阿見に向かった。だいぶ人が来ていた。電車や自動車で後から後からと、沢山の人が来る。兵舎の門をくぐって、飛行機が着くすぐ近くの水際で、待っていた。真赤な太陽がじりじりと照りつけるので、たまらなく暑い。日かげに居ても、汗がにじみ出てくる。早くから居て、そろそろ退屈になってきたので、時計を見ながら、あちこち歩き廻っていた。

ふらしそうだが、それでも眼をはなさない。あの小さな飛行機に操られているやうだ。一回廻ってから遠くへ行つたと思ふと、つと體をかはして、此方を向いた。だんだん水面に近づきながら進んでくる、着水だ。胸のすうつとするやうな、あざやかな着水ぶりを見せて、水をけ立ててなほ進む。格納庫の前に止まった。もう完全に霞ヶ浦に着いたのだ。すぐその飛行機のそばまで行こうとしたが、沢山の人が行けなかった。しかたなく照りつける日光の下で、格納庫の側に並んで自動車で行くのを待った。誰も、一歩でも前へ出ようとしない。数分待った。なかなか自動車は来ない。待っている者はいららする。遂に来た。花束などをぎつしりと積んだつぎの自動車だ。向って右側にはリンドバークが、日にやけた顔に溢れるばかりの微笑をたたへ、あぶらけのない髪がゆれている。左側には頭にびつたりとついた、耳まである帽子をかぶった夫人、顔一ぱいに喜びの色を表している。中央にアメリカ大使、自分の事のやうに、にこにこしていかにも嬉しそうだった。自動車は歓迎会へ向かったのだ。又駅前で大佐を迎えようと、電車に乗った。「(進修34号)・1931(昭和6)年12月18日発行)

また同じく3年生の岡田良典氏(中学33回・旧職員)は、間近で見たリンドバーク夫妻の様子を次のように述べています。

「午後2時10分滑走台を距たること400米の地点に無事着水し、機体はするすると湖面に二条の線を引いて滑走台に近づいた。そして空の王者リンドバーク大佐の姿がはつきりと操縦席に浮かび出た。また後の席には飛行服に身を固めた凛々しい『アン夫人』の姿も見え、その頬には微笑ささえ浮かんで、群がる群集は思わず歓呼の声をあげた。此の時愛機は第9滑走台にピタリと横着けされた。

リ大佐はひらりと操縦席から翼上に降り立ち、続いてアン夫人もリ大佐の胸までしかない小柄な体を機上に表すと再び『ウアー』という歓呼の声。リ大佐夫妻は陸上の歓呼に両手をあげて応え、馴れた態度で滑走台に降り立った」(進修34号)

夫妻は海軍航空隊第一士官宿舎の食堂で行われた歓迎会に出席後、土浦駅から列車で上京し、東京にある聖路加病院長宅に数日間滞在しています。その後、夫妻は土浦に戻り、出発まで滞在、仲良く土浦の町を散策する姿が見られました。霞月楼で催された海軍関係者による送別会に出席後、9月13日に大勢の人々の見送りの中を中国大陸めざし飛び立つていきました。



市内・霞月楼で催されたリンドバーク夫妻の送別会
掲載した3葉の写真は、霞月楼・堀越恒夫氏(高19回)から提供していただきました。